

関ヶ原合戦

SEKIGAHARA WAR

徳川の勝利は、豊臣恩顧の武将たちによって もたらされた

慶長5年（1600）9月15日の関ヶ原合戦で徳川家康は、軍事的勝利をおさめた。しかし、それが即座に徳川の覇権の成立を意味したわけではなかった。関ヶ原合戦で家康方（東軍）の主力を構成したのは、豊臣恩顧と呼ばれる大名たちであった。

福島正則（尾張清洲城主）をはじめとする豊臣恩顧の大名たちは反石田三成という点において、家康と利害をともしていた。これらの勢力を味方に取り込むことで、家康は軍事的勝利をおさめたわけである。しかしながら、豊臣恩顧の大名の多くは、豊臣家への忠節を捨てたわけではなく、むしろ、東軍につくことが、豊臣秀頼（秀吉の息子）の「御為」であると認識していたようである。このため石田三成が大坂奉行衆を味方につけ、豊臣秀頼の名のもとに、自軍の正当性を主張したことは、家康にとって恐怖であった。敵とも味方ともなりうる豊臣恩顧の大名に対し如何なる態度を取るべきかこの問題は、関ヶ原合戦後も家康にとって重要課題であり続けた。

細川氏も豊臣恩顧の大名の一人であるが、福島正則らとはやや立場を異にしていた。当時丹後国主だった細川氏は、終始一貫して、家康味方の意志を明らかにしていた。天下争乱の事態に際して、当主細川忠興は関ヶ原に出陣し、父幽斎は丹後国を守り、家老松井康之は豊後木付を守り、東軍の勝利に大きく貢献した。とりわけ、松井康之が九州の戦い（石垣原合戦）で軍事貢献をなした意味は大きく、戦後、細川家が九州の大名として確立する根拠ともなった。